

【テーマ】 一歩、踏み出す！（卒業前の3年生へ）

【対象】 高校生

【所要時間】 20分

【紹介する本】

	書名	著者名	出版社	出版年
1	センス・オブ・ワンダー	レイチェル・カーソン／著 上遠 恵子／訳	佑学社	1991
2	思考の整理学	外山 滋比古／著	筑摩書房	1986
3	海賊とよばれた男 上・下	百田 尚樹／著	講談社	2012
4	いま生きているという冒険	石川 直樹／著 100%ORANGE／装画・挿画	理論社	2006

【シナリオ】

●導入

皆さんはもうすぐ高校を卒業して、社会に出たり、進学して勉強を続けたりとそれぞれの場所へ向かうこととなりますね。新しい場所に飛び込んでいく時は、ワクワクしますが、同時に緊張したり不安もつきものです。そんな時に、ちょっとでも皆さんの心の支えになったり、役に立つような本を4冊紹介します。

1 『センス・オブ・ワンダー』

皆さんが小さな子どもだった頃のことを思い出してください。人生経験が少ないので、当然知っていることは少なく、目にみえるもの、生活の中で出会うことはすべて新しく、これは何だろう？ どうしてだろう？ と新鮮な驚きばかりだったと思います。でも、大人になると、いろいろなことを学習し、経験も重ねるので、子どもの頃のように、毎日が感激にあふれているわけではなくなってしまいますよね。

これは『センス・オブ・ワンダー』という本ですが、「センス・オブ・ワンダー」とは「神秘さや不思議さに目を見はる感性」という意味だといいます。この本を書いたのは、アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンです。著者は『沈黙の春』という本で、農薬を散布したことによって、春に鳴くコマドリが次々と死んでしまったという環境問題を告発しました。この本はベストセラーとなり、世界中で農薬の使用を制限する法律ができたり、環境運動の先駆けとなり社会に大きな影響を与えました。

『センス・オブ・ワンダー』は、レイチェルカーソンが、姪の息子ロジャーと海辺を歩いたり、自然を探索して一緒に過ごす中で気づいたこと、日頃から考えていた深い信念を、詩のような美しい文章で書いた本です。

ちょっと読んでみます。

p.21 1～8行目を読む 【子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。～（中略）～生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー=神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。】

では、このような、「センス・オブ・ワンダー」という感性を自分の中に育てることにどういう意味があるのか、というと

p.50 5行目～ p.52 2行目を読む 【わたしはそのなかに、永続的で意義深いなにかがあると信じています。～（中略）～地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができるでしょう。】

とあります。不思議に思うこと、物事への好奇心を持つことは、大人になってからも、とても大切なことだと思います。世紀の大発明も、不思議だなとか、これは何だろうと思うことがまず第一歩で、全てそこから始まるのだと思うからです。

2 『思考の整理学』

このようにセンス・オブ・ワンダーを使い、ひらめいたアイデアはどのように整理していったらよいでしょうか。

この『思考の整理学』という本は、言語学者でエッセイストの外山滋比古が、自分の経験をもとに、考えるということをつかりやすく解説した本です。アイデアを出す方法や、思いついたことをどのようにして、高度の思考にしていくかということについて書かれています。

さて、思考を整理するのに、最もよい方法がある、と著者は言うのですが、それはどんな方法だと思いますか？このページを読んでみます。

p.127 2行目、5～9行目を読む 【思考の整理には、忘却がもっとも有効である。】【忘れ上手になって、どんどん忘れる。～(中略)～思考の整理学とは、いかにうまく忘れるか、である。】

ちょっとびっくりしますね。自分にとって興味や関心のあることを忘れないため、そうでないことがらを忘れることで、自分にとって本当に価値があるものかどうか、判別できるというのです。もう少し読んでみます。

p.133 1行目～6行目を読む 【本はたくさん読んで、ものは知っているが、ただ、それだけ、という人間ができるのは、自分の責任において、本当におもしろいものと、一時の興味との区別をする労を惜しむからである。～(中略)～やがて、不易の知識のみが残るようになれば、そのときの知識は、それ自体が力になりうるはずである。】

とも書いています。

著者は、記憶力の優秀さだけを競う勉強法に疑問を持っています。知識を蓄積することは、コンピュータが得意なことであり、人間は知ることよりも考えることに重点を置かなければ、コンピュータに仕事を奪われるとも言っています。この本は36年前の、1983年に出版された本ですが、今まさにAIの発達で現実起こっていることです。

思考の整理法には他に、「寝させる」つまり、一晩寝て時間をおくことがよいと書かれています。ずっと考え続けるのではなく、しばらくそっとしておくと考えが凝固するのだそうです。

また、講演会などを聞くときは、本当に興味のあることは忘れないので、メモはとらないのがよいなどの様々な方法が載っていて参考になります。整理法他に、カードや手帳、ノートを使って思考を生み出す具体的な方法なども紹介されています。今までの方法から一歩踏み出して、思考の整理を始めてみませんか。

3 『海賊とよばれた男』

さて、思考は自分の価値観によって必要な物とそうでないものに判別されるということでしたが、次の本の主人公は、自分の中にゆるぎない価値観を持ち、それに基づいて行動し、力強く時代を生き抜きました。『海賊とよばれた男』を紹介します。

この本には、モデルとなった実在の人物がいます。石油を販売する会社、出光興産の創業者である、出光佐三という人です。この本の中では国岡鐵造という主人公として描かれています。

ところで皆さん、石油は私たちの生活にどのように関係していると思いますか？ガソリンは、車の燃料として使われていますね。灯油は、冬に部屋を暖めるストーブの燃料です。でもこれだけではないのです、ペットボトルに使われているプラスチック、傘のビニール、今着ている服も石油を元にした化学繊維で作られています。道路のアスファルト、化粧品や医薬品など、石油は様々な物に使用されており、20世紀は石油なしに繁栄できませんでした。石油の前には、何を主要な燃料にしていたと思いますか？それは石炭です。明治の後半、国岡は石油の将来性に注目し、国岡商店を立ち上げ、事業を拡大させていきます。しかし、日本は戦争に突入し、敗戦を迎えます。「石油がない」など様々な苦難を「海賊と呼ばれた」活躍で乗り越えた国岡は、国内外の圧力にも屈せず、アイデアと行動力で、日本を代表する企業へと発展させました。

国岡の会社には、タイムレコードも定年もありませんでした。社員を大切な家族と思い、信頼していたからです。仕事を通して人を育てるという意識で、会社を経営しました。また、いつも消費

者のために役立つか、ということを考えて商売を行い、会社を大きくしたり儲けたりすることよりも、戦後の日本という国を建て直すために力を尽くしてきました。

国岡が、過去を振り返っているところを読みます。

下巻 p.282 9行目～p.283 4行目を読む 【国岡商店にしても、海外資産のすべてを失い、国内には借金しかなく、仕事のない千名近い店員を抱えて途方に暮れていた。～(中略)～自らの信念を持って正しいおこないを続けていけば、絶対に間違った方向に行くことはない。】

何度も困難なことがあっても、決してあきらめず、信念を持って行動し、次の一步を力強く踏み出し生きていく主人公の姿に、勇気をもらいます。また、自分は何のために働くのか？働くとはどういうことなのか？ということも考えさせられます。

1冊が厚くて上・下巻ありますが、話の展開が早く、すぐにページをめくりたくなります。また、映画化や漫画化もされているので、そちらを見てから本を読んでもみるのもよいかもかもしれません。

4 『いま生きているという冒険』

さて、前の本は仲間を大切に、決して裏切らず、勇敢に戦う「海賊」のような人の話でしたが、海賊には冒険がつきものです。

次は、インドやアラスカ、北極や南極など世界中の国々を旅する写真家の石川直樹さんが書いた『いま生きているという冒険』という本を紹介します。

石川さんが初めて海外旅行をしたのは、高校2年生の時。アルバイトで貯めたお金を元に、インドへ一人旅をしました。以来、世界を旅することに魅せられて、20歳の夏には1ヶ月かけてカナダでアラスカのユーコン川を下り、仲間とともに1年間かけて北極から南極を縦断する旅のプロジェクトに参加、エベレスト(チョモランマ)にも登るなど、辺境の地での冒険に危険を顧みず挑戦し続けます。

この本には、写真もたくさん掲載されています。

p.128～129を見せてこれは南極の写真です。

p.164～165、p.168～169を見せてこれはチョモランマに登山しているときの写真です。

石川さんは、チョモランマのように、命の危険にさらされるような高い山に登る理由について、このように書いています。

p.163 1行目～13行目を読む 【どうして自分は高い山に登ったり、川や海に出かけたりするのでしょうか。～(中略)～だから登山はやめられなくなってしまうのです。】また、

p.167 9行目～p.171 4行目を読む 【チョモランマの頂上付近では、誰もが一人の生身の人間として自然と向き合わなければなりません。～(中略)～こんなに恐ろしい場所に毎日足を踏み入れるのは嫌ですが、でもあらゆる場所がチョモランマの頂上のような場所だったら世界はどうなるのかな、と少しだけ考えることもあります。】ということです。

でも、このようなところは、誰もが簡単に行けるわけではありません。しかし、私たちにも冒険をすることは可能だと石川さんは言います。

p.252 11行目～p.253 10行目を読む 【一方、旅に出るといのは、未知の場所に足を踏み入れることです。～(中略)～多かれ少なかれ、世界中のすべての人は旅をしてきたといえるし、生きることはすなわちそういった冒険の連続ではないでしょうか。】

つまり、どこで何をするのかということは、大した問題ではなく、自分の心に強く感じるものに向き合うことが大切なことだといえます。その部分を読みます。

p.254 10行目～p.255 1行目を読む 【現実は何を体験するか、どこに行くかということとはさして重要なことではないのです。～(中略)～だから、人によっては、あえていまここにある現実に踏みとどまりながら大きな旅に出る人もいるでしょうし、ここではない別の場所に身を投げ出すことによってはじめて旅の実感を得る人もいます。】

皆さんもこれからそれぞれの冒険に出発しますね。新しい冒険にまず一步、踏み出し、次の冒険へと飛び込み続けて、自分の世界を広げていってください。

●まとめ

本は、新しい考え方を教えてくれたり、大切なことに気づかせてくれたりします。また、本の中の言葉に勇気をもらうことや心が楽になることもあるし、実際の生活に役立つこともあります。も

し、家の近くに図書館があれば、ちょっと出かけて一歩足を踏み入れ、本棚を眺めてみてください。
たくさんの新しい出会いがあなたを待っています。

【その他の本】 こちらの本もおすすめです。また、ご自身で追加・差し替えをするなど工夫してみましょう。

- ・『世界を、こんなふうに見てごらん 』（日高 敏隆／著 集英社 2010年）
- ・『聞く力』（阿川 佐和子／著 文藝春秋 2012年）
- ・『天地明察』（中方丁／著 角川書店 2009年）
- ・『羊と鋼の森』（宮下奈都／著 文藝春秋 2015年）

山梨県立図書館 2019.2